

はじめに

本書は戦国大名今川氏の事蹟を年次ごとに叙述したものである。具体的には、第八代室町幕府將軍足利義政によって氏親の家督が承認された文明十一年（一四七九）から、氏親の孫氏真が駿河今川館を捨てて遠江国懸川城に入り、籠城後に岳父である小田原北条氏第三代当主氏康を頼って沼津に向かった永禄十二年（一五六九）までを扱っている。ただし、今川氏の領域下に入る氏親段階の遠江を語るにあたり、彼の父義忠、あるいはそれ以前の遠江国内の情勢等を理解する必要もあり、南北朝期から氏親の家督継承以前に関する経緯について、「戦国前史」として簡単にまとめた。また、氏真も永禄十二年をもって文書の発給を停止したのではなく、最終的には慶長十九年（一六一四）まで生存していたことに鑑み、永禄十三年以降についても簡潔に紹介している。

今川氏の研究は、戦前の『静岡県史料』第一―五輯の刊行によって深化した。『県史料』は家わけの史料集だが、収載文書も充実していたため、戦後間もない段階から様々な「情報」を研究者に提供していた。特に、一九五〇年代から八〇年代初頭まで、戦国大名研究の一大テーマであった検地研究において『県史料』が頻繁に活用され、それに併せて今川氏の個別研究も進展していった。

その後、静岡県レベルの史料集、あるいは県の通史を編集するといった構想は戦後になってもあまり進まず、八〇年代後半によく『静岡県史』が刊行されることとなった。その一環で『県史』資料編7中世三と同資料編8中世四が編集され、それまで知られていた戦国大名今川氏の受・発給文書と関連文書、さらには同時代の記録類、後世の関連資料に至るまで、まとめて活字化されることになった。また『県史』通史編2中世も出版され、見落と

されていた事象や新事実など、様々なことが明確となった。県史刊行はまさに今川氏研究の画期であったといえる。とはいっても、『県史』中世三は氏親の家督継承から氏真による懸川城開城までを収録しており、『戦国大名今川氏の約九十年を網羅した史料集』として早い段階で入手が困難となった。そのため、二〇一一年から五年の歲月を掛けて、『県史』で収録されなかつた被官層の受・発給文書や関連文書も採録して、『戦国遺文』今川氏編が上梓された。これによつて今川氏の関連史料は、そのほとんどが集成されたといつてよい。

しかし、刊行中の『愛知県史』や同県内の自治体史によつて、新たな史料も発掘されている。また、現在の今川氏研究は近隣諸大名の状況、室町將軍家や管領・奉行・奉公衆などの京都情勢の確認、聖教等の奥書の読み込みなど、多種多様な資料に至るまで目を配つていかなければならない。とりわけ近隣諸大名の動向は、史料集のみならず、論文集や自治体の博物館等の図録・報告書などにおいても、基礎的な検討が加えられてきている。

本書では、そうした近年の研究成果を重視する編集方針を採用したので、従来の年表と違つた年代を提示している場合もある。また、今川氏の文書は有年号かつ寺社宛のものが多いため、そのままでは事実を羅列した「無味乾燥」的な年表のようになりかねない。そのため、読み物風な叙述になるよう心がけた。さらに重要な事柄については、別途コラムを設定して論ずることにした。多忙の中、ご協力いただいた執筆者には、心より謝意を表する。

本書の刊行によつて、戦国大名今川氏の動向や、領国下における出来事といった歴史的な推移は明らかとなったといえると思う。しかし、いまだ解明されていない研究分野があることは言うまでもない。むしろ、そちらの方が多いというのが現状である。本書をきっかけに今川氏の研究が増えることになれば、と願っている。

二〇一七年三月

大石泰史

目次

戦国前史	12
駿河今川氏と遠江今川氏／遠江は東西の半国守護となる／今川範政、上杉禪秀の乱を鎮圧／遠江は斯波氏分国となる／今川義忠、駿河守護職を継ぐ／今川義忠討死／小鹿範満、駿河今川家を継承	16
文明十一年（一四七九）～文明十八年（一四八六）	16
氏親、將軍より父義忠の遺跡等を安堵される／長享の乱。範満の求心力低下	16
文明十九年・長享元年（七月二十日改元 一四八七）	17
伊勢宗瑞、駿河下向／氏親、幕府体制下に入る／小鹿範満生害	17
長享二年（一四八八）	18
駿州高橋で合戦／駿遠両国の安定／宗瑞、石脇城在城	18
長享三年・延徳元年（八月二十一日改元 一四八九）	20
延徳三年（一四九一）	20
堀越公方家の家督争い	20
延徳四年・明応元年（七月十九日改元 一四九二）	21
甲斐武田家の家督争い／氏親、甲斐侵攻	21
明応二年（一四九三）	22
明応の政変。宗瑞、伊豆国侵攻	22
明応三年（一四九四）	22
今川家の家宰として宗瑞が遠州へ侵攻	22
明応四年（一四九五）	23
宗瑞、拠点伊豆に移す／大地震発生	23
明応五年（一四九六）	24
氏親、遠江東部を支配	24
明応六年（一四九七）	25
氏親、遠江中部を掌握／宗瑞、伊豆に勢力拡大	25
明応七年（一四九八）	26
堀越公方茶茶丸、自害／遠江で大地震	26
明応八年（一四九九）	27

氏親、遠江東・中部の所務を支配／宗瑞、伊豆の安定化を目論む	28	城陥落。今川氏が確保	36
明応九年（一五〇〇）	28	今川氏の遠江支配は三河国境まで浸透	36
氏親、遠江守護斯波氏との戦闘準備に入る	29	永正五年（一五〇八）	42
明応十年・文亀元年（二月二十九日改元 一五〇一）	29	氏親、京都との音信を図る／氏親、遠江守護職を斯波氏から奪還／今川勢、三州岩津城での合戦に敗北	43
堀江要害の戦い・蔵王城合戦／斯波氏、信濃小笠原氏と協調体制	29	永正六年（一五〇九）	43
文亀二年（一五〇二）	29	氏親、三河出陣の意思表明／宗瑞、相模国へ乱入。	43
氏親、初めての禁制発給	31	宗瑞の自立	43
文亀三年（一五〇三）	32	永正七年（一五一〇）	45
文亀四年・永正元年（二月三十日改元 一五〇四）	32	今川勢、三河に侵攻／斯波氏、今川に押され引佐花平に陣を移す	45
古河公方家の内紛／宗瑞、扇谷上杉氏に合力／氏親・宗瑞、立河原で山内上杉氏と激突	32	永正八年（一五一一）	46
永正二年（一五〇五）	34	今川勢、斯波氏・井伊次郎・引間衆大沢氏を攻撃／井伊次郎を駆逐。直平が今川に属す／氏親、將軍の御内書を受ける	46
氏親、三河国衆奥平氏に約束手形／氏親、中御門胤宣娘（寿桂尼）と結婚	34	永正九年（一五一一）	48
永正三年（一五〇六）	35	今川・斯波、一時休戦	48
氏親、三河国へ侵攻／宗瑞、三州今橋城を攻撃／今橋	35		